街並みの変遷と住民の場所の記憶に関する研究

- 長野県宮田村宮田宿区域を対象として-

1X14D081-4 増田 大夢**

Hiromu MASUDA

日本各地で様々な事情により街並みは変化しているが、一方で個性や歴史、住民の思い出を活かしたまちづくりが望まれている。街並みの変化と住民の場所に関する記憶の関係を明らかにすることを目的として、長野県宮田村の宮田宿区域を対象に、住宅地図から建物・用途の変遷を把握し、住民へのヒアリング調査から記憶の集まる場所の調査を行った。その結果、変化が重層したことにより多様な対象について語られる場所と、過去の日常的な経験により特定の対象について多様な内容が語られる場所とが抽出された。また、現在も残っている建物を見ることによって、場所の記憶の他に当時の町の様子などが想起されることがみられた。

Keywords:宮田村、街並み、場所の記憶、住宅地図、ワークショップ

1. 研究の背景と目的

1. 1研究の背景

地方都市の中心市街地とされる地区の多くは、城下町や街道沿いの集落などの歴史的な背景を有していることが多いが、伝統的建造物群保存地区に指定されるような、ある一定の時期の歴史的景観が良好に保全されている町は稀であり、多くの町では様々な変化が重層した結果、複雑な街並みが形成されている。このような街並みは、一見ただ雑然としていると思われがちであるが、個々の建物や特定の場所に注目すると、変化していても住民の記憶や意識に強く残っているところがある。

地域の個性、歴史を活かすことや、住民参加を重要視したまちづくりが各地で行われている中で、住民一人ひとりが持つ町の記憶や思い出を共有し、後世に伝えていくことは重要なこととされている¹⁾。したがって、街並みが変化していく中で、住民がどのような変化を意識し、どのような場所を記憶しているのかを把握することは、地域の特徴を活かした住民参加のまちづくりを行っていく上で必要なことであると考えられる。

1.2 研究の目的

本研究では、住民の記憶に残る場所と、道路や建物、その用途などの街並みの変遷との対応関係を明らかにすることを目的として、長野県宮田村の住民の記憶や町の歴史を語る上で重要となりえる場所の特徴を探る。そして、住民の思い出を考慮したまちづくりを行うことに関する示唆を得ることを期待する。

2. 研究概要

2.1 既存研究の整理

1)場所の記憶に関する研究

窪田[®]は、記憶は過去の経験によって記銘されたものがそのまま保持されるというだけではなく、現時点に存在する「記憶の枠組み」に触れることによって、再び想起されたり、他人の記憶を自分の記憶として記銘し得るものであると述べている。そこで、千葉県佐原を対象に「歴史的なもの」と「記憶の枠組み」の関係を明らかにした。その結果、「記憶の枠組み」となるものは「歴史的なもの」に留まらないことが分かったとしている。

山口ら³⁾は、居住者の思い出は、単に外観にのみ依拠しているのではなく、さまざまな経験とともにまちなみを記憶しているとして、住民へのヒアリング結果を土地利用ごとに集計し、分析を行った。その結果、土地利用に応じて思い出の定着の仕方に「場所」と「経験」の寄与の度合いや、その形態に違いがあることを明らかにした。

2) 地図の分析と住民意識を比較した研究

添田⁴⁾は、地形図分析から読み取った都市構造と、ワークショップ・文献調査から把握した場所の意味の両面から、町の特徴を探る手法を確立した。多層化地図を用いることで、「自然的環境による意識」、「行為的継続による意識」、「様相変化の履歴による意識」の4つが、人びとの記憶に残る要因であることを明らかにしている。

森信 からは、埼玉県八潮市を対象に、地形図と文献調査から八 潮市の景観構成要素の特性を分析し、住民の景観認識との関係 を考察している。その結果、居住地区における身近な景観に対す る景観認識が高い傾向がある一方で、八潮市の景観特性である微地形と景観構成要素の分布の関係については、住民の景観認識に十分に結びついていないことが明らかとなった。

2.2 本研究の位置づけと研究の方法

既存研究より、地形や土地利用特性、建物利用の変化と住民の 記憶に関する研究は進められている。本研究では、住宅地図を使 い、詳細な建物とその用途の変遷を明らかにするとともに、それ らの変化と住民の記憶している場所との関係を比較する点に特 徴がある。

具体的には図に示したように、空間的な街並みの変遷を明らかにした後に、過去の写真を用いた住民へのヒアリング調査を行い、記憶に残る場所を明らかにして、2つを比較し考察する。



図 2.1 研究の流れ

3. 対象地概要

3.1 対象地の選定

本研究では、中心市街地の街並みの変遷に着目するため、過去から現在にかけて中心市街地とされてきた地区を選ぶことが望まれる。そこで、平成29年4月に景観計画 ⁶が施行され、その中で土地利用と道路の線形が100年以上ほぼ変わっていないことから、歴史保全区域に指定された長野県宮田村のまちなか「宮田宿区域」を対象地とする。

3.2 対象地概要

長野県宮田村は上伊那郡の中央に位置する村で、対象地に選定した宮田宿区域は、宮田村の町一区、町二区、町三区にまたがる中心市街地である。人口は町一区、町二区、町三区それぞれ950人、558人、2,205人(2017年11月現在)^つで宮田村の全体の約4割を占めている。

宮田宿区域の中央には南北に旧伊那街道が通っており、まちなかは、江戸時代から街道沿いの宿場町として栄えていた。その面影として、現在でも町屋や土蔵が見られる。しかし、町屋は空き家になっていたり、維持管理が大変であることから蔵を取り壊してしまい空地となっている場所も見られる。その他に、宮田宿区域には宮田村唯一の小学校や、神輿を石段の上から投げ落とし打ち壊す奇祭、祇園祭の舞台となる津島神社がある。

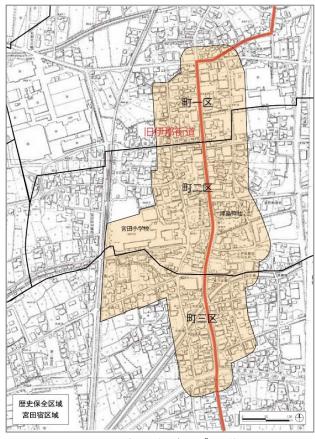


図3.1 対象地 宮田宿区域8に加筆

3.2 対象地におけるまちづくりの取り組み

宮田村の景観を考える会®という団体が、「まちなかをみる、しる、たのしむ、わかちあう」をキーワードにまちづくり活動を行っている。この会は、宮田村の景観計画の議論にかかわった有志で立ち上げられており、空地や空き家が増えてきて歩く人もまばらになってしまっているまちなかに、賑わいを取り戻すべく様々なイベントや取り組みを行っている。具体的な活動として、宮田村の宿場町としての歴史や、祇園祭の歴史に関することをまとめたパネルと古地図を展示する「まちなか博物館」や、歴史保全区域に指定されている宮田宿や田中道などの歴史を、実際に歩いて感じる「まちなか探検ガイドツアー」などを主催している。そのほかにもマルシェや、自宅に眠る古写真を持ち寄ってもらい当時の様子を語り合う交流会など、まちの魅力を再発見してもらうような活動を行っている。



図3.2 まちなか博物館



図3.3 まちなか探検ガイドツアー

4. 街並みの変遷の調査

4.1 住宅地図による分析

宮田村のゼンリン住宅地図は、1982年から2017年までの35冊 が国立国会図書館に所蔵されている。これらの住宅地図から、宮 田宿区域の範囲をArcGIS上で重ね合わせ、建物のポリゴンと道 路のポリラインを作成し、変遷を可視化できるようにした。

建物の用途は住宅地図に記載されている屋号から推測し、住居、 商業、工場、寺社・宝蔵庫、公共施設、蔵、倉庫・ガレージ・車 庫、不明の8つに分類した。分類の内容は、表4.1に示す。

記載内容例 用途 居住者名、アパート、社宅店舗名、事務所、病院 住居 商業 工場名、木工所 寺社・宝蔵庫 津島神社、白心寺、宝蔵庫 |公共施設 宮田小学校、消防、交番 クラ、土蔵 倉庫・ガレージ・車庫 倉庫、ガレージ、車庫

表 4.1 建物用途の分類

4.2 道路・建物の変化の把握

1982年から2017年までに道路の新設や、歩道確保のための道路 拡幅が数カ所に見られた。その位置と年代を表4.2に示す。

次に、調査期間の36年間における新築の建物は計162軒、空地 化・駐車場化した建物は計186軒あった。1999年に地図の縮尺が 変更された注)際、小さな建物が新たに記載されるようになり、 1999年に新たに現れた建物(新築)が50軒と急増しているが、ま ちなかは徐々に空洞化してきていることが分かる。

₹4.2 但四00友儿					
位置	年代	変化			
河原町西交差点(西側)	1984年(S58.10)から1984年(S59.1)	新設			
河原町交差点(東側)	1986年から1989年	道路拡幅			
津島神社前	1986年から1989年	道路拡幅、歩道整備			
河原橋(南北)	2001年から2002年	步道整備			
北町交差点付近	2013年から2015年	道路拡幅			

表42 道路の変化

4.3 建物の用途変化

用途毎の建物軒数の変化を見たところ、36年間で住居が34軒、 商業が42軒と大きく減少していることが分かった。一方、不明な 建物が48軒増加していることから、建物は残っていたとしても 空き家や空き店舗が増加していることが考えられる。

建物の変化について1982年から建物・用途がともに変化して いない「一致」、用途は変化したが建物が残っている「形態残存」、 建物は建て替えられたが用途は引き続かれている「利用継承」の 3種類に分類したものを図4.2に示す。

住居 商業 工場 神社・宝蔵庫 公共施設 蔵 車庫・ガレージ・倉庫 不明

1982年	242	142	16	5	9	0	15	72
1987年	228	145	15	5	12	2	25	78
1992年	251	142	16	6	9	2	25	44
1997年	243	130	17	6	9	2	23	52
2002年	276	118	15	5	10	4	20	64
2007年	219	106	10	5	10	4	18	125
2012年	220	104	10	6	12	3	15	118
2017年	208	100	11	6	11	4	15	120

表4.35年毎における用途別の建物軒数

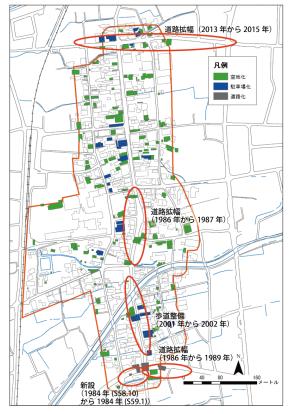


図 4.1 1982 年から 2017 年における道路変化と空地化、駐車場化

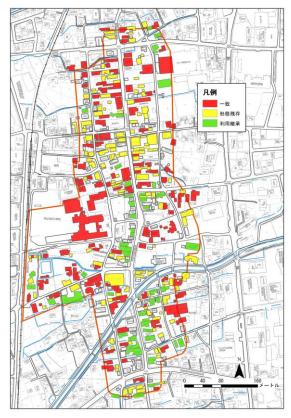


図42 用途変化と建物変化

5. 住民の場所の記憶の調査

5.1 住民の場所の記憶の調査方法

場所の記憶の調査は、まちなかの思い出を語っていただくワークショップを開催し、住民へのヒアリングから場所に関する記憶を抽出した。記憶には、場所の定位、変化、印象、知識を想起させる意味記憶と、個人の体験を想起させるエピソード記憶が存在すると考えられ、抽出した記憶を分類し分析を行う。

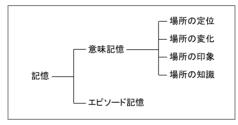


図5.1 記憶の分類カテゴリー

5.2 調査概要

ワークショップは、宮田村社会福祉協議会が行っているミニディサービスの場をお借りして、2017年11月15日、17日、22日の計3回行った。ミニデイサービス^でとは、65歳以上の家に閉じこもりがちな方、75歳以上で地区が認める方等を対象に、月1、2回、各地区の高齢者支えあい拠点施設等に集まって、体操、ゲーム、工作などを行って健康な日常生活が送れるように支援するサービスである。ミニディサービスの参加者をヒアリングの対象として選定したのは、対象地に一定の居住歴がある考えられるためである。また、ワークショップ形式でヒアリングを行ったのは、年齢の近い人とお話をしながら行うことで、昔の記憶がより引きだせると考えたからである。

ワークショップには、ふるさと宮田写真集¹⁰から引用した、少し昔の街並みの写真10枚と、2017年の住宅地図に1982年の商業系の建物情報を加えて作成した地図を使用した。写真は、旧伊那街道沿いを中心に、分布に偏りがないように選定した。

ワークショップの流れは、初めに写真と地図を見てもらい、周 りの人とおしゃべりをしながら、昔の記憶を呼び起こしてもら う。その後、写真ごとに思い出を語っていただき、最後にまとめ としてシートを記入してもらった。

5.3 ワークショップ参加者

ワークショップには対象地の宮田宿区域が含まれる、町一区、町二区、町三区のミニデイサービスの参加者29名と、ボランティアスタッフ6名の計35名の方たちにご協力いただいた。各区の参加人数は町一区12人、町二区9人、町三区14人であった。参加者は全員女性で、平均年齢84.3歳、まちなかの平均居住年数は57.9年である。

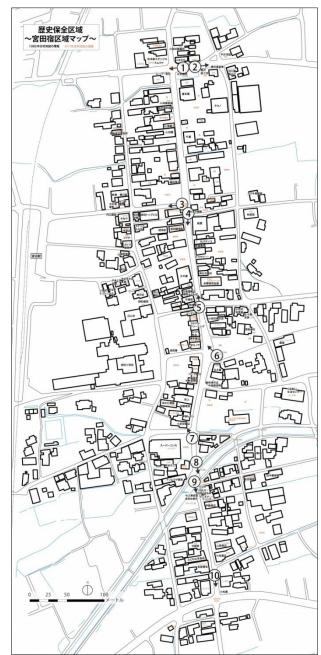


図5.2 ワークショップに使用した地図(写真位置を追記)

69	境所の記	強・思い出	具体的机	シエピソード や当時の特	17	
10 (1)	3(2). 800. 1	2 · 3				
2	1 -	2 . 3				
3)	1 -	2 - 3				
4	1 .	2 • 3				
3)	1 -	2 . 3				
6)	1 -	2 . 3				
(2)	1 -	2 . 3				
(8)	1 .	2 • 3				
9	1 -	2 • 3				
9)	1 -	2 . 3				
AUZ94	問題所の思い	ハ出もご自由に	日書きくださ	U ₁		

図5.3 思い出チェックシート



図5.4 ワークショップに用いた写真一覧

5.4 記憶の分類

思い出チェックシートに記入してもらった記憶と、ヒアリングによって得られた記憶を、記憶の対象と図5.1に示すカテゴリーで分類を行い、664の記述としてデータ化した。これらを対象別にみると、商店に関する記述が最も多く381個あった。商店に関する記憶の中でも、特にスーパーなどの食品店に関する記憶が多かったことや、商店に次いで町や通りに関する記憶、公共施設に関する記憶が多く見られたことから、かつての日常的な経験による記憶が語られやすい傾向があると考えらえる。

また、記憶の分類別にみると、全体では場所の定位に関する記憶が最も多く、次いで場所の知識、エピソード、場所の変化が多く見られた。しかし、町二区では場所の知識に関する記憶が最も多く、場所の定位が占める割合は20%であった。居住区別に写真ごとに語られた記憶の分類をみると、居住区に近いほど場所の変化、知識、エピソードの記憶が多く語られる傾向があり、居住区から離れるほど、場所の定位に関する記憶の割合が大きくなる傾向がみられた。町二区の写真では居住区によらず、場所の知識やエピソードに関する記憶が多く語られていたが、これは町二区が周辺に住む人にとっても生活の場であったためだと考えられる。



図5.5 記憶の対象の構成比



図 5.6 記憶の分類の構成比

5.5 記憶の場所

分類した記憶のうち、自宅に関する記述と知人の家の定位に関する記述を除き、場所が特定できた565の記述を地図上にプロットした。居住区別にみると居住区の近くに関する記憶がまとまって多く語られていたことが分かる。特に、町一区の北町と、町三区の河原町に関しては、他の地区に住む人の記憶は著しく少なかった。一方で、町二区では、町一区、町三区に住む人の記憶も多かったことから、町二区はまちなかでも特に中心地であり、周辺に住む人にとっても生活の場となっていたことが明らかとなった。

また、場所について語られる記憶の他に、場所の記憶から、昔の村の様子が派生して語られることがあった。具体的には、製糸工場だった建物や津島神社があげられ、昔は芸者や商人がたくさんいて賑わっていた様子が語られた。このような場所は、昔の記憶を語る際に、手掛かりとなる場所であると考えられる。

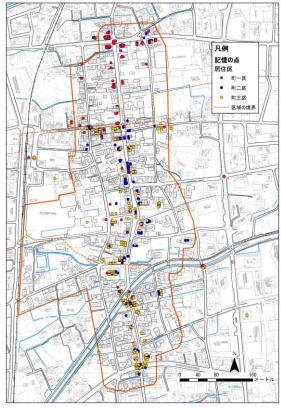


図5.7 記憶の場所

6. 街並みの変化と住民の記憶の比較・考察

6.1 場所の変化と住民の記憶の比較

5章で明らかとなった記憶が多く集まる場所について、場所の変化と住民の記憶の比較を行った。記憶が多く集まる場所における変化をみると、語られた記憶の対象は建物・用途がともに変化し「消失」してしまっていることが多いことが分かる。このよ

うな場所は、スーパーや美容院、郵便局など、かつての日常生活に密着していた施設のあった場所や、道路の新設や拡幅によって、空間そのものが大きく変化した場所であった。建物は変化したが用途は変化せずに引き続かれている「利用継承」の場所に関しても、記憶が多く集まるのは、かつてよく利用された商店であった。用途は変化したが建物は変化していない「形態残存」の場所でも、現在の用途に関する記憶は少なく、過去の無くなった対象について多く語られていたが、想起される対象が一つの場所で複数あることが多かった。建物・用途がともに変化していない「一致」している場所で多くの記憶が語られたのは商店の他に神社があった。

変化によらず多くの場所で語られた商店について、記憶の対象の現在の様子を、現在もある「存在」、建物は残っている「形態残存」、建物・用途ともに失われた「消失」に分類して記述数と対象数をみると、記述数・対象数は共に「消失」したものが最も多かったが、対象当たりの記述数は「存在」、「形態残存」がより大きな値を示した。

表 6.1 記憶の集まった場所とその変化

場所記憶数	場所の現状(語られた過去の対象)	変化
23	宮田トップビル、酒井電機、昭栄軒(とり吉)	一致
22	住居(小田切輪店、よもかわ、テンジン)	消失
19	河原町西交差点西側(道路、大きな建物、旧ふじわら洋品店、農地)	消失
18	末広町(通り、置屋、チンドン屋など)	-
17	オヒサマの森(旧下駄工場、こいち)	形態残存
14	住居(シナノヤ)	消失
	駐車場(チムラヤ)	消失
	親愛の里シンフォニー(旧信金、八十二銀行)	形態残存
13	モンパルノ(田口屋)	利用継承
12	町二区公民館(旧郵便局)	消失
11	(小田切川沿いのお豆腐屋さん)	不明
10	河原町せせらぎ公園(旧中上美容室、鍛冶屋)	消失(移動
	小松屋	利用継承
	住居(旧二ュ一千代本)	消失
9	カラオケハウスみみ(旧銀行、信金、質屋、商工会、みなみ屋、オリイ薬局	形態残存
	空き家(西笹屋、製糸工場)	形態残存
	小田切川沿い(通り、家)	-
8	北町(町の賑わい)	-
	駐車場(水足医院)	消失
	空地(勤労者の店、テンジン、セイキョウ)	消失
	津島神社(芸者、祇園祭)	一致
	河原町西交差点東側(旧あさひや)	消失
	河原町(通り、飲み屋、家など)	-
	空地(でこすけ)	消失
7	池上	利用継承
	正木屋前通り(旧信金前通り)	-
	中上美容室(旧吉田医院)	形態残存
6	空地(旧こいち(町一区))	消失
	小田切甘盛堂	一致
	すし・割烹梵(パチンコ屋、俵屋、大黒屋(八百屋))	形態残存
	津島神社入口(旧盛谷製麺所、服部製麺所)	消失
	町二区・津島神社前通り	-
	空地(旧伊藤酒屋)	消失(移動
	あさひや	新築(移動
	トノムラヤ(旧ふじわら洋品店)	一致
	お茶田設備宮田(営)(有賀自転車、たまご屋)	消失

6.2 考察

今回、平均年齢80歳以上の女性にヒアリングを行った結果、商 店や公共施設などに関する記憶は、対象がなくなっても記憶が 語られていたことから、かつての日常的な体験によって場所は 記憶されていると考えられる。また、「形態残存」となった場所 では、語られる対象が複数ある場所が多かったことや、商店につ いて、対象の現状別に対象当たりの記述数を見たときに、現在も 存在しているものが最も多く、次いで形態残存しているものが 多かったことから、建物が残っていることにより、過去の様子や 状態が語られやすくなることが考えられる。

7. まとめ

7. 1 得られた知見

本研究では、街並みの変遷に対する住民の記憶の集まる場所に関して分析をしてきた結果、以下の点が明らかになった。

- 記憶が多く集まる場所は、過去の日常的な体験によって特定 の対象が多様な内容で語られる場所と、変化が重層したこと により多様な対象について記憶が語られる場所があること が明らかとなった。
- 特定の場所について語る際は、建物が残っていることで、過去の様子や状態が語られやすくなることが示唆された。

7.2 今後の課題

今回、街並みの変遷を調査するにあたり住宅地図を用いたが、 住宅地図のみでは土蔵や町屋などの特徴的な建物を把握するこ とができない。現地調査をすることによって、今も現存している 建物は住宅地図に記載されない情報も把握することができるが、 過去に無くなってしまった建物は把握できないことが課題であ る。また、今回は宮田村の一部の年代の方の場所の記憶しか集め られていない。対象者の年代や性別を変えたときに、記憶の集ま る場所にどのような違いが現れるのかを検討する必要がある。

<注>

注1) 住宅地図は1999年と2003年12月に縮尺の変更をしている。 <参考文献>

- 後藤春彦、佐久門陳富、田口太郎「まちづくりオーラル・ヒストリー「役に立つ過去」を活か し、「懐かしい未来」を描く」: 水曜社, 2005
- 2) 窪田亜矢「水郷の商都・佐原における「記憶の枠組み」についての研究 「歴史的なもの」との関係をふまえた考察-」:日本建築学会計画系論文集第705号、p. 2443-2452, 2014
- 山口美緒、機長真、渡辺貴文「住工混在地域における居住者の心象風景の解明」: 都市計価論文 集 Vol. 31 pp. 745-750, 2001
- 4) 添田信行「地方都市における多層化地図を用いた場所性の分析に関する研究 一埼玉県本庄市を 対象として一」: 早稲田大学修士論文 2009
- 5) 頼言秀一郎、荒井歩「埼玉県八潮市における景観変遷と住民の景観器職に関する研究」: ランドスケーブ研究 73 (5), pp755-758, 2010
- 6) 長野県宮田村「宮田村景観計画」 平成29年4月発行
- 7) 宮田村IP https://www.vill.miyada.nagano.jp
- 8) 文献5), p. 35より引用
- 9) 宮田村の景観を考える会HP https://miyadanya.jimdo.com
- 10) ふるさと郷育応援事業実行委員会「ふるさと宮田 写真集」平成29年3月15日発行